

水草植栽水槽におけるセタシジミD型仔貝生残実験

井戸本 純一

◆背景・目的

現在、草津市地先の南湖で行われている湖底耕耘事業がセタシジミの放流効果や再生産におよぼす効果を明らかにするため、水草の有無や底質の違いがD型仔貝の生残に対して短期間にあたえる影響を調査した。

◆成果の内容・特徴

- 南湖の底泥または砂を敷設した0.5トンFRP水槽に数種の在来水草またはオオカナダモを植栽した区と対照区を設けた。
- 底に細かいメッシュを張った内径11mmのパイプにそれぞれの底質を少量入れ、セタシジミのD型仔貝約350個体を入れて水槽の底に静置した。
- 3日後の生残数はいずれの区も差がなかったが、10日後には泥を敷設した水槽のすべての区でほぼ全滅した。
- 砂を敷設した水槽では、10日後にオオカナダモを植栽した区で全滅し、1か月後には水草を植栽しなかった対照区でのみわずかに生残が確認された。

◆成果の活用・留意点

- D型仔貝の減耗が極めて短期間に発生すること、水草の繁茂が減耗を助長する可能性が示唆されたが、直接的な減耗要因は未解明である。
- 砂質底の対照区では糸状藻類の発生が悪影響をおよぼした可能性がある。

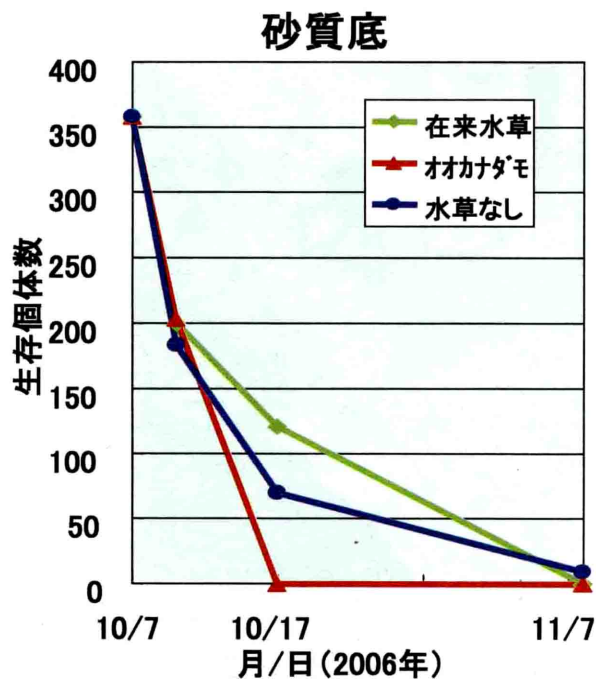


図1 砂を敷設した水槽における水草の有無とセタシジミD型仔貝の生残.

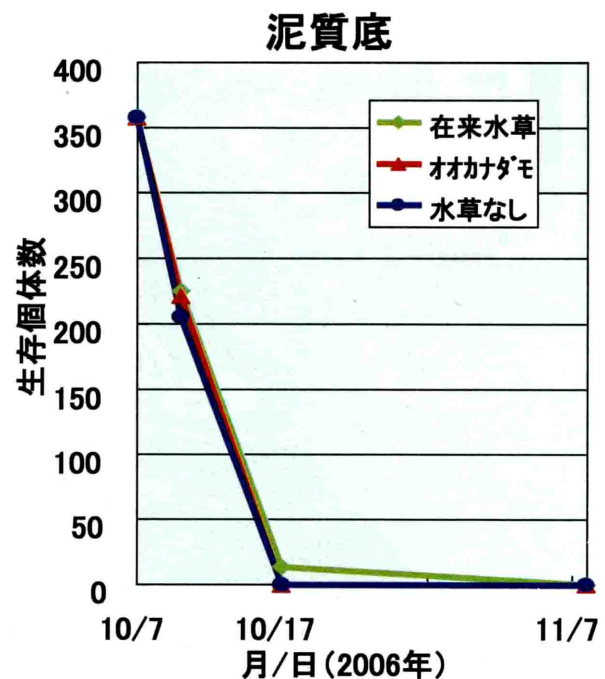


図2 泥を敷設した水槽における水草の有無とセタシジミD型仔貝の生残.

* 本報告は水産庁による平成18年度湖沼の漁場改善技術開発委託事業の成果の一部である。